Roman Books

昭和40年5月17日　第1刷発行

著者　戸川昌子
発行者　野間省一
印刷所　信陽堂印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽町3ノ19
振替東京3930
電話東京（942）1111（大代表）

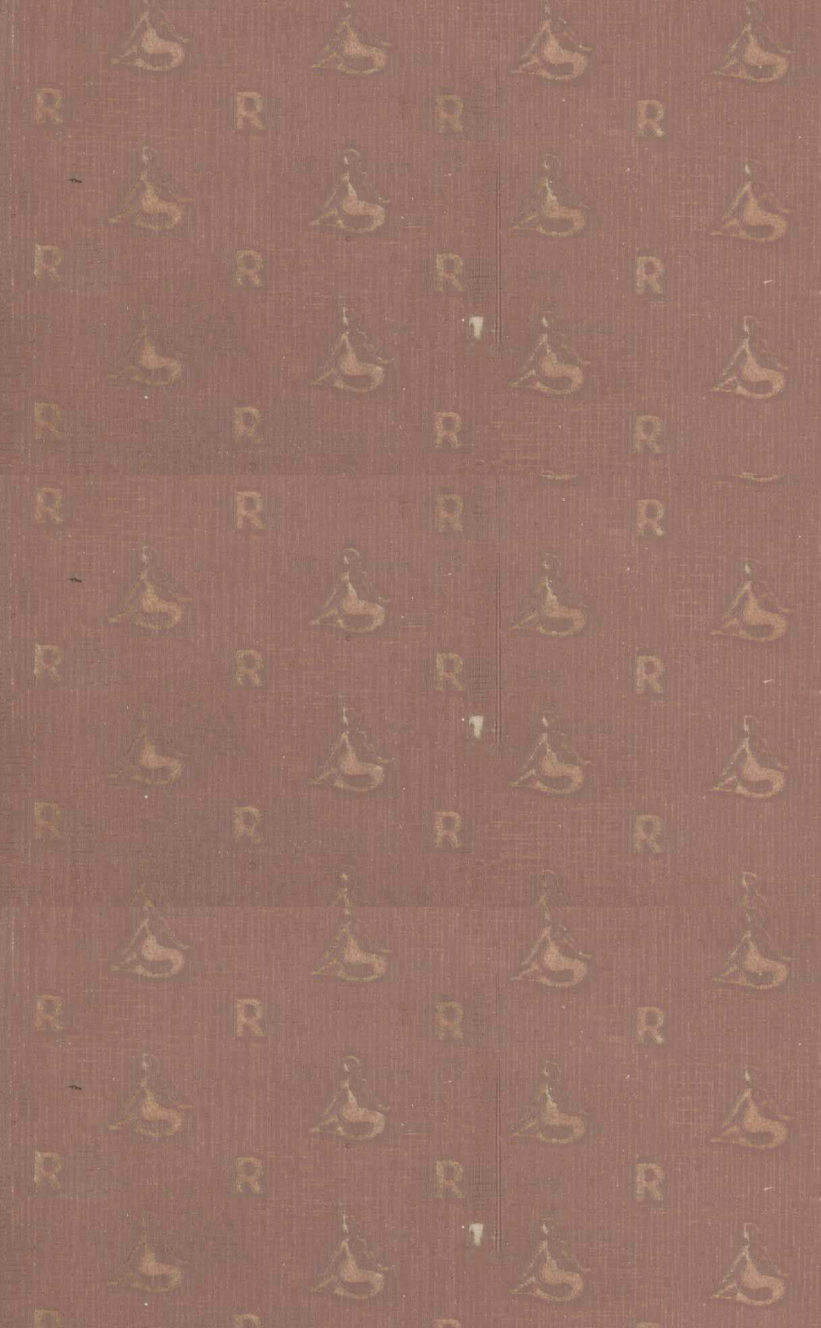
猟人日記

240円

©戸川昌子 昭和四十年

（落丁本・乱丁本はおとりかえいたします）　Printed in Japan

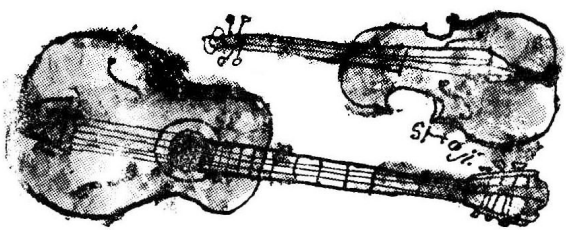
Roman Books



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

獵人日記

戸川昌子



Roman Books

装幀
山藤章二

撮影
福田由也

目次

プロローグ……一一
第一部　狩と獲物
追うもの……二六
最初の獲物……四二
第二の獲物……六七
第三の獲物……八四
インターバル（幕間）……一〇七
第二部　証拠の採集
弁護士……一二四
血液銀行……一四一
黒い汚点……一八七
エピローグ……二二一

猟人日記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

プロローグ

何か虫の知らせとでもいうのか？
さもなければ人間が、このように
暗澹と押しかぶさる激情に包まれ
るわけがない。ただ言葉を聞いた
だけでこんなに心が乱れるわけが
ない。

―「オセロー」四幕一場―

（木下順二訳）

1

彼女は酒場の二階にいた。一階を見おろせる手摺のすぐそばのボックス席に、ひとりで腰をおろしていた。

そこからは入口のところに立っている白い上衣のボーイと、一階のスタンドの中でシェイカーを振っているバーテンとが見えた。それも渦巻いている煙草の煙の中にぼんやりと見えるだけだった。スタンドに向っているお客たちや、下のボックス席に坐っている連中の姿は、薄暗い酒場の空気の中に溶けてしまっていて、まるで見えなかった。

二階のスタンドではバーテンがひとり、所在なげにグラスを磨いていた。

スタンドの隅の止り木で、若い男が二人、これも顔を寄せながら何かひそひそと話し合っていた。誰も彼女に注意を払おうとしなかった。

彼女はどうみても酒場のお客にはみえなかった。お化粧らしいお化粧もしていなかったし、年も二十歳前にみえた。ただ、店に入って来たとき、ひどく思いつめた顔をしていた。

一階の席はどれも埋まっている様子だった。ざわめきが絶えず波のように手摺のすぐそばの彼女の足もとのところまで昇ってきては、また退いていった。

彼女の心は相変らず空虚だった。酒場の喧噪も遠のき、世界全体が真暗に感じられてしまうほど

だった。
彼女はテーブルの上のグラスに手をのばすと、半分ほど残っていた琥珀色の液体を喉もとに流しこんだ。それは彼女が生れてはじめて味わった三杯目のウイスキーだった。口の中が熱くなり、体がさきほどよりもまた少し軽くなったような気がした。
彼女は立上ると、転ばないように気をつけてスタンドの方へ歩いていった。
バーテンが彼女の手の中の空のグラスを見ると、
「お早いピッチですね」
と笑いながら言った。
彼女はバーテンの笑顔に合せてにっこりと笑った。バーテンには愛想をよくしておいて損はないはずだった。この酒場を出てどこへ行く当もなかったのだから。
「ええと、三杯目でしたね。今、テーブルへお届けしますよ」
バーテンは伝票にチェックするふりをしたが、なにも書かなかった。一杯おまけするつもりなのだ。
彼女はもう一度にっこり笑うと、手摺のそばのテーブルに戻って行った。今度は前よりも少し仕合せな気がした。そんな些細なことが、彼女の今の人生にとっては一番大切なことだった。見知らぬ他人のほんのちょっとした好意——《そうだわ、あとでお返しに煙草をあげなくては……》
バーテンが新しい受皿とカット・グラスをテーブルの上に運びウイスキーを注ぐと、足音をたてないようにして戻って行った。
彼女はまたひとりになった。そのまま目を閉じて、ゆらゆらと揺れる赤や緑の線の入り混った闇のなかに坐っていた。

さきほどまで頭の中で鳴り続けていた金属音も、うまい具合に鳴りやんだままだった。

しばらく経って、音楽がなりはじめた。それは頭の中で自然になりはじめた音なのか、外から聞こえてくる音なのか区別がつかなかったが、そんなことはどうでもよかったのだ。彼女は自分だけの世界に漂いながら、その音楽に合せて爪先で拍子をとった。一、二、三——一、二、三——爪先を動かしているうちに、音楽がバイオリンとギターの合奏だということに気がついた。陽気なポルカだった。≪あたしの大好きだった曲だわ。あの頃は何も考えないで幸せだったわ≫

涙が溢れはじめ、次から次へととめどなく流れてきては、頬をぬらした。その間に、ポルカがワルツに変り、そしてわけのわからないリズムになった。

そんな状態が何分も続いたあとで、突然、あの一生忘れることの出来ない低音の歌声が聞こえたのだ。その声は肉声とは思えない、まるで教会堂の中でふいに響き渡ったパイプオルガンの低音部の音のように、足もとから湧きあがり彼女の心をしっかりと囚えてしまったのだった。

その低音の声は〝流浪の民〟を歌っていた。低い、沈痛な、魂をゆさぶるような思いをこめて歌っていた。

ぶなの森の葉がくれに
うたげほがい賑わしや
たいまつ明く照らしつつ……
木の葉しきてうずいする
これぞ流浪の人の群……

酔払いのだみ声と女給たちの調子はずれのソプラノが、やはり大声でわめいていたが、彼女の耳にはその低音(バス)の声しかきこえてこなかった。

彼女はそろそろと目を開くと、おそるおそる手摺の下をうかがった。流しが二人バイオリンとギターを弾いているほかは、誰が歌っているのか皆目わからなかった。

彼女は遠慮がちに、階下の歌声に合せて〝流浪の民〟を歌いはじめた。〝流浪の民〟のアルト・パートは高校の合唱部で何度も練習した得意の曲だった。彼女が歌いはじめると下の低音(バス)の歌声と調和して、美しいコーラスになった。彼女はもうやめるわけにはいかなかった。彼女が口をつぐむと、下の歌声もやんだ。彼女が歌いはじめると、下の声もそれに合せるのだった。やがて伴奏のバイオリンとギターの音がやむと、低音(バス)の歌声も聞こえなくなってしまった。誰が歌っていたのかしら——好奇心が押さえきれなくなって彼女は立ち上ると、何かの糸に操られるように階段を下りていった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb